

「対照言語学研究会」2009年度報告
モダリティと言語普遍性・個別性

武内道子

本研究会は今年度で12年目を迎えた。「言語は人間の精神活動の鏡」と言われている。ことばほど人間の心、あるいは知性について、驚嘆すべき、興味深いことを教えてくれるものはない。われわれの研究会の目的は、言語科学の最新の成果および言語学の諸領域(音韻論、文法論、意味論、語用論、言語獲得、語法研究、談話分析、言語教育)の研究成果を手掛かりに、人間の心や知性について深く考えてみようとするところにある。

昨年度から「モダリティ」現象をテーマとしている。モダリティ現象は、言語能力とはそもそも何か、この能力はどのようにして獲得されるのか、言語能力は他の人間の認知能力といかに関わっているのか、ことばによる情報授受のやり取りの実際はどんなものかという問題を解明する上で、大きな課題を提供し、「いかなる意味で精神活動の鏡である」といえるかを究める切り口を見出してくれると思われる。さらには、英語教育をはじめとする言語教育への応用という側面にも重要で

魅力的なトピックである。

これまでの言語理論が英語中心で、「命題の文法」の構築ということに専心してきた傾向があることは否めない。そこで多くのことが構築されたのは疑いが無いが、日本語をはじめ多くの言語でその言語特有の現象が説明できない、捉えられないという指摘がなされてきている。「モダリティ」を、命題を包む諸現象と緩やかにとらえ、使い手である人間を考察の射程に入れるということを切り口に、多様な言語からの検証を得て、人間言語の本質、人間の心の解明につなげていきたい。

昨年度は語用論的視点からモダリティを見るワークショップを中心に、各言語におけるモダリティ現象をあぶりだし、今年度は統語論的視点からのワークショップを企画して(12月5日)、各自あぶりだしたトピックの考察・分析を深めている。来年度はモダリティ現象を言語教育との関連から考察することを中心に据えるつもりである。
